

「私達の事を話してゐるんだよ」

「何て？」年上の婦人は卑いやしむ様に眉を寄せて訊いた。

「我達がスラブ人の中で一番善い連中だつて話してゐるのさ」肥つた男はくすくす笑ひ乍ら答へた。

「おべつか使ひね」と婦人は言つたが赤髪のジョンは時計を藏つて両手で髯をひねり乍ら、

「あの人は私達のことなんか全然まるつきり知らないんですよ」

「お前が讃められてゐるのに」と肥つたのが言ふ「お前は知らないからだなんて」

「馬鹿な！私の言つてるのはさう言ふ意味ぢやないんですよ、然し

一體から云へば——私達はスラブ人の中で一番善い連中なんですよな」

頬髭の男は暫く海豚の遊ぶのをぢつと眺めてゐたが太息を吐き首を振り乍ら、

「馬鹿な魚だなあ！」と言つた。

また二人の男が白髪の伊太利人の仲間に入つた。

眼鏡をかけた老人は黒のフロックを着、蒼白い青年は髪を長く伸して、額が廣く眉毛は黒々としてゐる。皆な露西亞人の一行から五ヤード計りの所に立つてゐるのだ。白髪の老人が物靜かに、

「私は露西亞人を見るとメツシナの事を想ひ出す」と言ふ。

「ナポリで漁師に逢つたのを憶へてゐますか？」て青年は訊ねた。

「皆な、あの林中でのあの日の事は忘れられまい！」

「あの名譽の賞牌を見ましたか？」

「勢働者の事なんか私は全く考へない」

「連中はメシナの事を話してゐるんだよ」

肥つた男が一行に報せた。

「そして笑つてゐるのね！」若い婦人が叫んだ。

「愕くわね！」

海鷗は汽船に趁ひつき、一羽はそのくねつた羽を叩きながらひら
く、舷の上空を舞つてゐる。若い婦人がそれにビスケットを投げ

てやつた。鳥はそれを咬へては舷の下へ隠れ込み、又暫くすると哀
れげに鳴き乍ら、がらんとした蒼海の上へ舞ひ上る。

珈琲が伊太利人の間へ運ばれた。こつちも鳥にビスケットを投げ
て、餌をやり初めた。婦人は肩を上げて、

「お猿さんを御覧なさいよ」

肥つた男は伊太利人の生々しい話になほも耳を傾け續けてゐたが
やがてのこと、

「ありや軍人ぢやない、商人だ。露西亞との穀物の取引に就いて話
してゐる、露西亞から石油と材木と石炭とが買へると話してゐる
んだよ」

「軍人でないと私も一目で解りましたわ」と年上の婦人は言つた。

赤髪の男は頬髭の男に耳語き初めた。頬髭のは聴き入り乍ら不審氣に口を歪めた。若い伊太利人は流眸に露西亞人の一行を眺めて、

「残念だが、わし達はこの大きな碧眼の人の國をよく知らないんでね——」

今や太陽は空高く昇つて、かん／＼と照りつけた。海は眩しきまでにざら／＼と輝いてゐる。遠方の港の方には連山と浮雲とが水面から飛び上つてゐる。

「アンネット」頬髭の男が耳元まで微笑を湛えながら云ふ。「あの道化者のジョンがどんな企圖をしたと思ふね！村から不平者を逐拂

ふ名案を思ひついたので、非常に上手な遣方だね」

椅子に身を揺りながら、緩たりと他國語から翻譯でもする様に躊躇ひ勝な態度で話す。

「企圖と云ふのはね、休日と市の日に地方の郡長に命じて棒と石油を官費でうんと買ひ集めさせるのだ。それから、これも官費で、人数に依つて七升五合なり、一斗五升なり、又は三石七斗五升なりを百姓達に與へるのさ。それだけで済むのだ！」

「解らないわね」年上の婦人は叫んだ。「そりや戯談でせう？」
赤髪の男は言下に答へた。

「否、眞面目な話しさ」

若い婦人は眼をぱつちり開いて眉を揺つた。

「政府が火酒^{ウツカ}を飲ませるなんて、馬鹿な、もう皆なあれなのに……」
「まあ、お待ちなさいリージャさん」赤髪の男は叫んで、椅子からはね起きた。頬髭の男は體を左右にゆすぶつて、大口開いてからくくと打笑つた。

「考へてごらんなさい！ 酔ひどれずにあた不平連が、其棒と石とでお互に撲り殺し合ふちやありませんかへ。ねえ？」

「何故お互に？」と肥つた男が訊いた。

「そりや戯談でせう？」と年上の婦人が又訊き返した。

赤髯の男は短い腕を矢駄羅に振り廻して説明したがつた。

「當局が彼奴等を慰撫すると民主黨は慘酷、兇暴呼ばはりをするんです。彼奴等自身慰撫する手段があると云ふのはそこですよ。ねえ、どうです？」

汽船は突然一方に傾いて、がちや／＼と陶器が鳴つた。肥つた婦人は「わつ！」と叫んで卓子にひがみついた、年上の婦人は肥つた男の肩に手を掛けて鋭く、

「何んでせう！」と聲を張り上げた。

「廻轉するのだ」

水面に浮んだ海岸がずん／＼高く瞭然^{つかり}し出した。霧の込めた丘や傾斜した花園が見える。藍色の漂石が葡萄島から覗いてゐる。白塗

の家が霧を透して見へる。窓硝子は日光に煌き、明るい平野が瞳を迎へる。渚の右方の断崖の麓の邊に一軒の小さな家が、海に面して美しい紫色の密叢に蔽はれてゐる。其上には赤いゼラニウムの花がこんもりと宛然赤い大きな流れの様に地壇の石の上に垂れてゐる。凡ての色は喜ばしく、海岸線は滑らかににこやかな姿をしてゐる。連山の柔かな輪廓は花園の蔭へ人々を誘つてゐる様に見える。

192

「何から何までこののは小さいね！」肥つた男は太息を吐いて云ふ。年上の婦人は彼の方をきつとみつめてから、薄い唇を噛み、頸を仰向けて柄附眼鏡越しに海岸を眺めやる。

顔の黒い輕装の人達が數人甲板へ出て來て話し合つてゐる。

「いやに手を振るのね」若い婦人が云ふ。肥つた大男は息を殺して説明した。

「言葉が悪るいからね、貧弱なんだ。だからヂエスチユアーをしなければならないのさ」

「おやまあ」年上の婦人は深い息を吐きながら言つた。

「ヂエノアには博物館がいくつもあつて？」

「三ツあつたと思ふ」と肥つた男が應へる。

「それから墓地は？」若い婦人が訊く。

「カンボ、サントか？教會は勿論……」

「御者はナボリの様に悪い？」

193

「モスタワの様に悪いがね」

赤髪の男と頬髭の男とは身を起して熱心に他人の口を遮りながら話しつつ舩を離れた。

「伊太利人は何を言つてゐるの？」かう訊いて婦人は結髪を掻き上げた。肱は瘦せて耳は大きく朽葉の様に黄ばんでゐる。

肥つた男は、鬢髪の伊太利人の快活な話にちつと耳を濟ましてゐる。

「ユダヤ人をモスクワに入らせないのは餘程古くからの律法らしいね。ジョン暴王の専制政治の遺物に違いない。英國にだつて、今でも廢止することの出来ない不用の律法が澤山あるからね。あの

ユダヤ人は私を誤魔化さうとしてゐたらしい。兎に角、何かの理由から彼奴はモスクワへあのツアーリの舊都、神聖な都へ入られなかつたんだね。」

「然し、この羅馬では市長がユダヤ人です。——モスクワよりもずつと古くて、そしてずつと神聖な羅馬で」青年は微笑みながら言つた。

「そして市長は如才なく法王を訪問するんです——あの小ぼけな裁縫師はね。私達は市長の成功を祈りませうさ」と眼鏡の老人は言つて手を叩いた。

「なあに、詰らんことさ、ナポリの話をしてゐるんだ」

「そのユダヤ人は然しモスクワへ行つたんです。勇氣があつたんだね、そしてモスクワの魔窟へ行つたものなんです。自分の行けるのは其處だけだとそのユダヤ人は言ふんですよ」

「お伽噺だ！」と老人はきつぱりと一言ひ放し、其の話を押しつける様に腕を振つた。

「實は私もさう思ひますがね。」

「慥にお伽噺です！」

「それで、どうなつたんです！」と青年は訊いた。

「女のために警官へ賣られたんです。然も女はちやんと彼から金を巻きあげてゐたんです。」

「ひどいことをするな」老人は言ふ「下劣な空想家なんだ。私は大學で數人の露西亞人を知つてゐましたが、皆な善い連中ですがね」

「然し奇體なことがありましてね……」

「聞きましたよ」

肥つた露西亞人は汗ばんだ顔をハンケチで拭きながら物うげな、無頓着な調子で婦人達に、

「ユダヤ人の逸話をしてゐるんだ。」

「あんなに元氣づいて」若い婦人は微笑した。年上のは

「この國の人達は、手を振つたり、がや／＼言つたり、皆な同じ様

にね」

町が海岸に見え出した。丘の上には家々がごちやごちや建て込んで一齊に太陽光を反射する堅固な壁をなしてゐて、宛然で象牙の彫刻みたいだ。

「ヤルタの様ね」と若い婦人が起ち上りながら言ふ。

「私リザのところへ行こう」

藍色好みの服装をし、たでつぶりした體を静かに甲板に歩ませた。伊太利人の一行の傍を通ると、半白髪の男は話を反らし、もの
和らげに

「涼しい眼ですわね——」

「まづたくね」と眼鏡の老人は肯いた「バシリリーダあんなだつたら
うと想はせるわね」

「ピサンチのバリシーダ？」

「なにスラブの女ですよ」

「なにかリーヂヤの事を話してゐるんだよ」と肥つた男が言ふ。

「なにね？」若い婦人が訊く「きつと何かの戯談でせう？」婦人は
眉を寄せた。

汽船の上の黄銅製のものは、海岸に近づくに連れて、優やさしくきら
／＼煌めく。埠頭の黒ずんだ岸壁も見え出した。そして帆檣が空に
向つて林の様に立ち列んでゐる。彼方あちこち此方に鮮かな彩色した旗が静

かに垂れてゐる。黒煙が立ち降つて空中に溶込む。油と石炭屑の匂ひが湛ふ。港の騒ぎ、大市街のごつちやになつた轟が耳に響く。肥つた男はいきなり笑ひ出した。

「どうしたの？」婦人は灰色がゝつた澤のない眼を細めて、訊く。

「獨逸人がすつかり、ぶち壊こぼしますせ、どうも、え！」

「そんなことがなせ面白いの？」

「面白いさ」

頬髭のある男は靴底を檢べて赤髪の男に向ひ、ことさら聲を張上げて、

「君はこの出来事に満足したのか、満足しないのか？」と訊いた。

赤髪の男は髯をきゆつと捻つて何んとも應へなかつた。

汽船は進行を緩めた。緑色の水は、逆らふやうに、白り船腹に飛沫を浴びせた。水面には大理石の家々も、高い港も空色の地壇テラスも、影をひそめた。黒い港の口は開かれて、そこには幾十隻の船がぎつしりと泊つてゐた。

海からの使

海からの使

無数の金属性の針金が橄欖樹の深い茂みの中に張られてゐるやうだ。風がそのこわばつた硬い葉を揺り動かすと、その葉が針金の絃線に觸れ、その軽い永續した切觸が、ほてつた酔ひ狂ふやうな響で大氣を充たす。それは音楽ではないが、その響はなんだか、眼に見えない、幾つもの手が澤山の立琴を夢中になつて掻き鳴らすやうだ。そして人々は樂器を合奏しながら、太陽に、空に、そして海に向つて力強い讚美歌が歌はれる前の沈黙の瞬間に待ち草臥くたびれてゐるやうだ。風が、山から海邊へ揺り下つてゐるやうな樹々の梢を震はせてゐる

る。海の浪はきちん／＼と打ち上げては海岸の岩にぶつかつて、それを包んで行く。海はゆらめく白い斑点で蔽はれてゐる。宛然澤山の鳥が、藍色の延板のべいたの上に留つてゐるやうだ。そして皆なして同じ方向へ浮遊しながら微かな響をたて、海の深みへ消えたり現はれたりしてゐる。

地平線上に灰色がかつた鳥のやうに見える二隻の船が帆を張りつめ伴廻りの鳥を引き具しながら動いてゐる。凡ての光景は、茫然りした長い夢心地の中に人を誘ひ込む。全く現實を離れてゐる。

「あの風が凡てのものを生々させるんです。」と一人の老寄つた漁夫が岩蔭にあたる、ざく／＼してゐる小さい砂礫山に腰を据え乍ら言

ふ。

激浪が、香を帯びた海藻の——褐色や、黄金色や、緑色の絡み合つたのを岩の上へ打ち上げた。打ち上げられた海藻は熱した岩の上で太陽光を浴びて萎れて行く鹽分よぐを含んだ空気は鋭く沃素の臭を湛えてゐる。ひよろ／＼とうねくり廻つた海藻が礫山の方まで飛ばされる。

その年寄つた漁夫は鳥に似てゐる。彼の顔は、こぢんまりとして鷺の嘴みみたいな鼻を持つてゐる。殆ど、皮に寄つてゐる皺の中に陰れ込んでゐるその眼といつたら、小さく丸味がつて然もキユツと鋭い。歪んだ指は骨張つてどつ／＼してゐる。

「五十年前のことだがね」と其の老人はその打ち寄せる浪の音やこ
うこぎのすだく音に應はしい調子で話した。——「五十年前と
云へば自分の父が四十歳、自分が十六歳だ。自分はちやんとその
頃戀心を萌してゐた。——十六歳と云へば當然だが。」
そして太陽は輝いてゐる。

「(ガイドー！二人でビゾニを漁に出かけようちやねえか。)と親爺
が私に云ひ出したのですよ。ビゾニつて云ふのは薄紅い鱈をした
軽い味のする魚でしてね、一名珊瑚魚とも呼ぶんです。なせつて、
珊瑚の生えてるやうな深みに棲んでゐるからなんです。そいつを
捕るには錨を下してから、重い鍾にくくり付けた釣針で釣るんで

す。綺麗な魚ですよ。

「二人は大漁を願ひながら船出しました。私の親爺は丈夫な男で老
巧な漁夫でしたかね、恰度その頃に病にとりつかれて居まして
ね、胸の痛みに悩むやら、僕麻質斯で指が縮んでゐたと云ふ終末
なんでせう——親爺は冷たい冬の日に稼ぎましたが、漁夫は辛い
つて泣言を言つてゐましたつけよ。

「この邊の風は妙に旋曲りで突調子もない吹き方をしますからね。
それ、岸邊から海の方へ靜にあなたを持つて行くかと思へば、
突然にせり上げる。そうかと思ふとあなたが風を怒らしでもした
やうに、あなたへぶつかつて来る。風を喰つたら小船なんか打毀

さればらくくに吹き飛ばされますからね。船體もろ共あなたの體
なんかも水の中へ浚さらひ込まれますよ。いつでもこんな破目に打付ぶつか
かる瞬間にや、神様を呼ぶ暇もありません。一たまりもなく
巻き揚げられ、海の中へ放り込まれてしまいますからね。風も恁
うなると、追剌より悪ござんすよ。それでも、ねえ、あなた、人
間てものは自然の力より尊いもんですよ。

「さうです。恰度私達が海岸から三哩程離れた處で私達に跳びか
ゝつてたんです。——卑怯な無頼漢みにだしぬけに撃ひかゝ
つてね。どうですあなた、

(ガイドー)て親爺はその利かない手で撓を扼みながら言つたんで

す(止めろ、ガイドー。早く。——錨を下ろせ!)私が錨を下ろ
しかけた時親爺は一つの撓で胸を撃たれ、目を廻して、船底へ前
倒り込んだ。助ける暇もないんです。ひよつと油断すりや二人な
がら浚はれさうなんでせう。突嗟とつさの事件です。私が撓を扼んだ時
砂の様な水煙が狂ひ立つて二人を立ち籠めて了つたんです。

風は浪の鼻端を撈り取り、恰度私達の罪を淨めると云ふやうな願
もなく、只だ見榮に洗禮をする坊さんみたいに二人の頭へ水を浴
せかけました。

「(こりや悪るく見そこなつたわ!)と親爺は我に返つた時言ひま
してね、海岸の方をちつと見つめました。(ちき止むだらう、なあ

悴。)こふ云つたのです。

「人間つて奴は若い頃には、滅多に危いなんてことを、心から思ふもんぢやありませんや。

私は焼を漕ごうとしました。こうした遭難の時、水上で出来るだけのことを演りました。

其の時、獄道の悪魔の息に似た風が無数の墓をしんめりと掘つて行き、無駄な鎮魂歌を歌ひます。

「まあ、坐はれ、ガイドー、」親爺はせせら笑ひ、水を頭から振り拂ひながら云ひました(まつちの軸で海を衝ついて何んの役にたつたよ？ちたばたするなよ、どの道、家ぢや待ちばけさ。

「縁の浪は、子供が球ボールを投げるように小さい船を、投げ上げる、船の両側から私達を覗いたかと思ふと私達の頭の上まで伸び上る。唸く、震へる、私達は深い穴底へおちこむ、そしては又も白浪の天邊へ上る。でも海岸は段々私達から遠ざかつて行き、私達の小船と同様に踊つて見えるんです。

（お前は土地へ歸れるだらうが、俺は——とても駄目だ。俺が漁師の仕事に就いて話して置くからまあ聽いておけよ。）と云ひました。

「それから親爺は魚の種々變つた種類の様子に就いて自分の知つて

るだけ話を話しましてね、何處で何時、何んな風にやれば一番良く捕れるかを教へました。

〔父さんは祈らなくてもいいのか？〕

私は二人が救はれないときまつた時に親爺に訊いたもんです。

私達は四方から噛みつく白色の臘犬の群の中にある小兎の様にもんでした。

〔神様は凡てを御覽になつてゐるんだ。さうとすれば神様には今大地のために創られた人間が海で滅びかけ、然もその一人が救ひを望んで神様に報げたかつてゐることを御承知なんだ。神様は御承知なんだとも。〕

全世界のため、人民のため、肝心なのは祈りぢやない働くことだ。神様にはそのことが解つてゐるさ。

〔そこで親爺は自分の働いたことに就いて洗い浚い語つてから、人間は何ふいふ風に他人と暮さにやならないかと云ふことを話しましたよ。〕

〔俺に教へるのに恁魔時がいゝのか？〕

と私は云ひましたよ。(俺達が陸おかにゐる時、父さんは何んにも俺に教へて呉れなかつたせ。)

〔海岸で俺やこんな死が近づくのを覺えたことがないからよ。〕
〔風は野獸みたいに咆えたて、浪を烈しく跳ね飛ばすんです。親爺

は私に聞えるやうに大聲で叫びました。

「いつものな。昔前自身に比べて善いと云ふ者も悪いと云ふ者も生きちやいない積りで振舞ふんだぞ。地主も漁師も、僧侶も、それから兵隊も皆な一つの體に屬してゐるんだ。お前には、それ等のどれが必要なんだ。其奴を善人だと云ふよりも悪人だと云ふやうな考へを以つて人に接するなよ。善事が悪事に優ると考へろ、そして、さうなるだらふ。人間は自分の求められたものを與へるのだ。

「こうしたことを一時にづらつと言つたのぢや勿論ありません、命令の言葉みたいにはぼつ／＼言つたのですがね。二人は良のまに

／＼上つたり下つたりしてゐる、で親爺の言葉も或は下の方から或は水煙を通つて上の方からやつて來るんでせう、だから親爺の言ふ事も大抵は私の耳に達しないうちに打ち消され、よくは解らなかつたんだす。なにしろ死に脅かされてゐる時お談儀を聴かざるんでせう！私はもう縮み上つてゐました。そんなに荒れ狂ふ海を見たのは始めてでしたものね。私には、とても助らないものと云ふ氣がしましたよ。その時の氣持は今でも私の記憶に瞭然り映つてゐますがね。その氣持をなめたのはその現場でか、後でその時を想ひ返した時なのか自分にも云ふことが出來ません。

「なんだか親爺の姿が目にもちらつくようです。親爺は弱つた腕を差

し延べ船の兩縁^{べり}を握り締めながら、べつたり船底に坐つてゐました。帽子は浚はれる、前後左右から浪が親爺の頭と肩へふりかゝる。

親爺は頭を揺振り、ひつきりなしに鼻を鳴らしたり叫んだりしてゐました。そしてすかり濡ひよぼれて小さくなつて震へてゐるやうに見えました。苦しんでゐたのでせう。眼をくり／＼させてゐました。苦しかつたんでせうよね。

「(聴きな——)と親爺は叫びました(聞へるかな?)」

「(時々聞へる)と私は答へました。」

「(善いことは皆な人間から來るつてことを覚えて置けよ)」

「(覚えて置く!)」

「親爺は陸でこんな風に私に話したことは全くなかつたんですがね。親爺はにこやかで優げでした。でもそれは私がびく／＼してゐるのを蔑んでゐるのだと私には見えました。——親爺にとつては私は小僧子ですものね。時々それが癢に障りもしました。何故つて若い男の誇りは強いつてことですもの。」

「それを瞭然り覚え込まふとするため、親爺の叫び聲は私の怖れを和らげました。」

其の年寄つた漁夫は白い海の方をちつと見やり微笑を湛へながら暫く沈黙に耽つた、そこでちよつと瞬きをして言ひました。

「私は人間を氣を附けて見るやうになつた時、知ることが理解することだと云ふ意味が解りましたよ。あなただつてよく見れば見る程、瞭然^{はつきり}り解つて來ます。それは慥に眞實です。

「え、私は親爺の濡れしよばれた顔が私に大變親しげであつたこと、その大きな眼が非常に熱心に優しげに私を凝視^{みつ}めてゐたのを覚えてゐます。それでなんとはなしに自分は滅びはしないと云ふ氣が其時しました。私は震へてゐながら、自分は死なないと云ふことが解つてゐたんですね。

「船は無論倒覆^{ひっくりかへ}つて了ひました。二人は渦卷く水、目を蔽ふ泡沫の中へ落ち込み、鋭い浪の頂^{うね}に取り圍まれた。浪は二人の體を玩弄^{あそ}

び、船の胴腹へ叩きつけたりしました。私達は二人の體を船體に何んでも構はず結べるものでくくり着け、繩で縛り上げました。そして船から引つたくられまいとして長い間、根限り力を盡しましたが、船に噛り付いてるのは骨でした。暫くの間二人は船體と一緒に揉まれてゐましたが、やがて浚ひ流されたんです。

「弱つたことには眩暈がし出しましてさ、耳が遠くなる、目が霞む——水が目や耳に這入つたんです。その場の様はお解りでせう。

「こんなことを永い間——たつぷり七時間——やつてゐたんです、すると急に風向が變つて、海岸の方へ吹き出しましてね、私達を風につれて掃きよせて行きました。私は雀躍^{こんど}して喜び、叫んだん

です。

(止んだぞー)

「親爺も、亦叫んでたやうですが

(奴等が俺達を木葉微塵にするぞー)と云ふの」か聞き取れません
でした。

「親爺は岩のことを指して言つたんです。でも岩からは随分離れて
おましたし、私は親爺の言ふことを本気で受け取りやしませんで
したさ。親爺は矢張り私より先が見えてゐたんです。

私達は自分達の『私達を養つて呉れる母』へ蝸牛みたいに縋りつ
きながら大浪の中を突き進んで行きました。浪は二人の體を船に

打ちつける、私達はすつかり疲れ果て知覺を失つて了いました。

こうして長い時を過ごしたんです。でも一度、黒い山が目映り
出してからと云ふものは凡てのものが素早く動きました。その山
が千鳥足で私達の方へ近寄つて来る、頭の上でごろ／＼しながら
浪の上へ寄り曲つて来るように見えなす。一、二！白浪が二
人の體へ跳びかゝつたと、船は靴の踵で踏み潰された胡桃みたい
に粉々にされました。私は船からおつぱり出された、と鋭いナイ
フのような、又は悪魔の瓜のような岩鼻が目につきました。親爺
の頭は私の上の方へ飛び上つて見えました。脊^{せなか}を打ち割り頭蓋骨
を碎いた親爺の屍が岩の上で見つかつたのはそれから、二日の後

でした。頭の痕は大きなもんでしてね、脳味噌がはみ出してゐました。血で染められた大理石みたい赤い筋が傷口に交つてゐました。親爺は滅茶苦茶に打ち砕かれてゐましたが、顔だけは傷も受けず静かです。ね、眼をちつと瞑ちてゐました。

「私？え、私も烈くひどやられましたさ、浪は知らぬ間に、私を引づり廻し、アマルヒの向ふの大陸まで運んで行つたもんです——私達の知らない土地でしたがね、その人達は矢張り漁師で、私達の仲間です、縁者です、彼等は脅しもせず親切に扱つて呉れました。劔呑な暮しをしてる人間はいつも親切なもんです——

「私が親爺に就いて感じたこと、そして四十一年間、心に抱いてゐ

た思ひのまゝを話されないのは残念です。一つの唄を作るにさへ選ばれた言葉が入りますもの、然し、私達は魚みたいに單純な種族ですからね、思ひのまゝに立派に瞭然はつきりと言ひ表せるもんぢやありません、人間はいつだつて自分で話せる以上に感じもし、知りもしてゐるもんです。

「こうした凡ての事件の中で一番深く心を惹いてゐるのは親爺が自分の死が近寄つてゐるのを見抜いてゐながら愕きもせず、私を、自分の息子を忘れないでゐたことです。隙を見ては自分が大切に思つてた事を皆な私に話さうと努めたことです。私は六十七年の間生きて來ました。私は云ひ切ることが出來ます。親爺が私に言

つたことはみんな眞實です！」

老人は編帽子——以前は赤かつたがすつかり色の褪めた——を取り、それから煙管を外した。そこで禿上つたブロンド色の頭を鳥渡傾げながら力を込めて言つた。

「あなた、全く眞實です！人々つてもものはあなたが御覽なさる通りです。優しい眼で見れば皆な、あなたにもそれ等の者にも爲たにな
るんです。彼等を一層善くし、そしてあなたも！簡単なこつて
さ！」

風が心地好げに吹く、浪は段々高く鋭くなり、眞白だ。鳥が海の上
に現はれ静かに飛び廻つては遠方へ消え去る。一ぱいに帆を孕ん

だ二隻の船は、藍色の水平線상을過ぎて行く。島の峻しい岸はレト
スのような泡沫で縁をとられてゐる。藍色の水が狂はしげに跳ねと
ぶ。蟋蟀は絶間なく鳴きつゞける。

村
の
名
譽

村の名譽

「その日此の事件が起つた時には熱風が吹き荒れてゐた——亞弗利加から吹き寄せる熱した風、塵まみれの風！その風が人の神経を掻き亂し、人の氣分を悪くした。そのためでもあらうか、ヂュセツプ・シロツタとルイジ・メタと云ふ二人の禦者が喧嘩を演つてゐた。仕うして二人が喧嘩を始めたのか誰も知らなかつた。ルイジがヂュセツプの上に武者振りついて、その喉首のど笛ぶえを掻きむしつてゐるのを皆なが見たのだ。ヂュセツプは口頭や太い赤茶けた頸を庇かばふやうに自分の肩を突張つりながら固い黒づんだ固を振り廻してゐた。

二人は引き分けられて訊かれた。

「一體どうしたと云ふのだ？」

眞赤になつて憤りたつてゐるルイジは叫んだ。

「此の牡奴に俺の女房に就いて此奴がほざいたことをもう一度皆の前でぬかしてみろがいゝや」

シロツタは逃げかけた。彼の小さい眼は太々しげに歪めた顔の皺の中へ埋つた。彼は黒い弾丸みたいな頭を振つて、其の悪口を繰返すのを拒んだ。

するとメタは大きな聲で喚いた。

「彼奴は俺の女房の想ひもので、その楽しみを知つてゐるとぬかし

たんだ。」

「えい」人々は言つた。「いや冗談ごつちやない、とくと極めなきやならない。まあ、ルイジは静かにしてゐろよ、お前は俺達の間では他國人なんだ、お内儀さんはこの者だ、俺達は皆なお内儀さんが小供の時の近付ちかづきなんだからな、お婦さんの罪を責めるなら、俺達を皆な一緒に責めなきやならないんだ、まあ俺達に委せて置けな！」

皆なの者はシロツタを取巻いて話した。

「お前はそんなことを言つたのか？」

「さうだ、俺いや言つたよ」彼は首肯いた。

「そりや眞實のことなのか？」

「今までに、俺が嘘を言つたのを知つてる者がゐるかへ？」

シロツタは尊敬すべき男であつた——彼は夫であり又親であつた。事件は由々しくなつて來た。其の場に居合す者は皆な面食つた。そして信じられないように見えた。

ルイジは家へ戻つてコンセツタに言つた。

「俺りや出て行くせ！あの惡黨野郎の言葉が根もない誹謗であることとの證據をお前がたてられるまでは俺りやお前に用がねえのだ」
「勿論彼女は泣き出した。然しその涙も身の潔白を證嘘だてはしなかつた。彼女は食物も金もなく、腕に子供を抱いたなり置去られ

なければならなかつた。最先きに仲裁に飛び込んで來た女はカセリンであつた。彼女は小さい雜貨店の主人で狐みたいに知慧のある女であつた。彼女の様姿は肉と骨をこたく／＼に詰込んだ古い袋の様に見える。

「お前さん」と彼女は言ひかけた。

「お前さんは、このことが私達皆なの者の名譽に關はるつてことはお聞きだらうね、月の輝く一夜に起つた洒落ごとぢやないんだから。二人の運命には母達が交つてゐるんですよ、さうぢやない？私達はコンセツタを私の家へ引き取つて、私達が事の事實を極めるまでコンセツタを私と一緒に暮させます」

「彼女はその言葉通りのお人好だつた。そこで、彼女とルジカと云ふ、三哩も向ふにゐて、その聲が聞えさうな喧々しい皺くちや婆さんの二人が、哀れなジュセツプを捕へた。二人は彼を呼び出し、老ひぼれた乞食の様な彼の魂を撈り始めた。

「さあ、お前さん、お前さんは一體何遍コンセツタとお會いだつたの？」

「肥つちよのジュセツプは頬を腫はくらせ乍ら、暫く考へた舉句云つた
「一度ですよ！」

「考へなくつたつて云へさうなもんだ」とルジカは自分自身に言ふ様に聲高に口を入れた。

「さうしたことであつたのは夕方か、夜か、それとも朝のことなの？」とカセリンは裁判官みたいな恰奴で訊ねた。

ジュセツプは即座に夕方を指した。

「まだ日が輝いてゐたんですね？」

「ゐました。」と其の愚かものは答へた。

「それならお前さんは、彼女の體あひとを見たんでせうね？」

「そりや見ましたとも」

「どんな様姿をしてゐたかを、それちや私達に話してごらんなさ
い」

「彼は終にその間で遂ひ詰められたことを悟つた。そして大麥の粒

が咽に塞つた雀みたいに、口をあんぐり開け放した。さうと悟つた彼は、一息吹いてから腹だたしげにぶつくさ言ひ出した。血潮はその大きな耳を眞赤に染めるまで迸走つた。

「私にそんなことが言へますかへ？ 私はお醫者みたいに彼女を調べやしなかつたんですからね！」

「お前さんは何んでも關はず、その形體を吟味しないで果物を食べますかへ？」とルシカが訊ねた。「ですがね、何か一つぐらひコンセツタの特徴つてなものに氣がついた筈でせうにね」彼女は自分でもさうした様に笑ひながら知らん風をして問ひ詰めて行つた。

「全くだし抜けに起つたこつだから、眞實を話さうにも私は何も覺

えちやいませんやね。」

「それぢや、お前さんは彼女に會つたことがない譯になりますよ」とカセリンが言つた。彼女は優しい女であつたが必要に應じては烈く嚴格にもなれた。とう／＼此麼風にして二人はジュセツプを狼狽させ、そして頭のこんぐらかつた彼は、そのためにちよく／＼尻尾を出して——白狀するようになって了つた。

「全く形もないことなんです。惡戯から一寸言つたんです。」

「この言葉は別に二人の女を驚かしはしなかつた。」

「私達の思つてゐた通りだ」と二人は言つた。そこで彼を歸してやつてから其の事件の形は皆なの決定に委せることにした。

「それから二日過ぎのこと我々労働者連中が會合した。鍛冶工である老人のジャコモ・フアスカは重々しげな調子で口を開いた。

「市民諸君、仲間諸君、そして善良なる皆さん！我々は正義か我々になされることを要求する。我々の間に於ける我々は、凡ての者に正義であらねばならない。凡ての人をして我々が高い価値を知り、それを求めるてゐることを知らしめなければならぬ。そして正義は我々の主人達にとつて空な言葉であるとしても我々にとつては空な言葉でないことを知らしめなければならぬ。ここに一人の男がある、其の者は一人の女を讒訴し、友達の氣を害い、家族を破滅させ、そして他人に悲みを與へた。其の者は自分の妻

を嫉妬と恥羞に惱ませた。此の男に對する我々の態度は嚴酷であらねばならない。諸君は如何になさんと欲するか？」

「六十七の舌が一聲に叫んだ。

「自治體から逐ひ出せ！」

「十五人の人は、それは餘りに苛酷すぎる懲罪だと考へた。そこで爭論が持ち上つた。そして其の爭論は非常に喧騒を極めた。何故つて？一人の男の運命がその決議に左右されるのだから、一人の男だけの運命ぢやない。その男は結婚をして、三人の子供を持つてゐた。彼の妻は、小供達は什うなる？彼は家を、葡萄園を、二匹の馬を、近所の衆の使用のために四匹の驢を持つてゐた。凡て此等は彼自身

の働きで得たもので彼に投げかけた苦しみの報酬であつた。

哀れなジュセツプは小供達の中に交つて狐鼠々々してゐた。そして大抵の悪魔に見られるやうな陰鬱な顔をしてゐた。彼は一脚の椅子の上に腰を卸し、帽子をひねくりながら打向いてゐた。飾紐リボンを手切つて了い此度は鏝をちび／＼裂き撈つてゐるのだ。彼の指は提琴を弾いてでもゐるやうに、びく／＼動いてゐた。何か言ふ事があるかと訊ねられた時、彼は静に立ち上り姿勢をきちんと正して云つた。

「大目にお許しが願いたい！罪のない者つて一人だつてありやしません。三十年以上も私の棲馴れた地土、私の祖先もそこで働いて

たその土地から私を追ひ出すのは正しいことぢやないでせうよ。」

「女達も彼を立退かせるのには反対だつた。そこでジャコモ・フアスカは終に次の様な提案をなした。

「諸君、私は彼にルイジの妻子を扶持する儀務を負はせたなら、彼は十分な罰を受けたこととなると思ふが——でルイジの収入の半分を彼女に、彼から拂はせる！」

「彼等は長い間その事に就いて議論した、そしてとう／＼さう決めることにした。ジュセツプ・シロッタはこうして軽く済まされたことを喜んだ。尙この結著おさまりは一同を満足させた。其の事件が法廷へ持ち出されずに自分達だけの仲間中で刀物三昧にも及ばずに形がつい

たから。

「私達は私達によく解せない言葉で新聞なんかへ私達の事件を書かれたかない。私達に解かる言葉つて云つたら、年寄の口の中にちらほら生えてる齒みたいに僅かしかないのだ。裁判官なんか私達のことを話して貰いたかない、何故つて裁判官は私達とは縁のない人間だし、私達の生活を理解してはゐないのだから。彼等が私達のことを話すとすれば、宛然、私達は野蠻人でもあるやうに言ふ、そして自分達は肉や酒の味も知らず、女に觸れたこともない神の使みたいに言ふのだ。私達は單純な種族で單純な見方で見てゐる。」

「そこで皆なはジュセツプ・シロツタにルイジの妻子を扶育さすよ

うに決めた。

然し其の結果は妙に變つたことになつたのだ。ルイジがシロツタの言葉が眞實でなく自分の妻に罪のないと云ふことが解り、そして私達の決議を耳にした時、彼は妻の所へ手紙をやつて家へ戻ってくるやうに呼び出した。

「俺の所へ歸つて來な、また舊通り二人で楽しく暮すからよ。そんな男から鑑一文だつて貰らつちやいけないぞ。若し何か貰らつてゐるなら其奴の顔へ叩きつけてやれ！俺やお前に罪な眞似をしたよ。だが色戀つてこんなことで男が出駄羅目を云ふとは思ひも寄らなかつたからな。」

「彼は尙シロツタへも手紙を書いた。」

「俺には三人の兄弟がある。そして四人で恚う云ふ誓ひをたててゐるんだ。若しお前が其の島を去つて、ソレントのキャストレメア―か又はトレ―の土地か何處かへ去ればお前を殺して了ふとね。俺達がそれを見付け次第お前を殺すとなア――この誓は俺達がお前の組合に加はり、善良な正直者であると同じ様に確かなんだ。俺の女房はお前に救けて貰ふ必要を持つちやいない。俺の豚だつてお前の食糧を喰ふのは跳ねつけるだらう。俺がお前に良しと言

ふまで此の島を去りなさんな。――」

「まったく不意撃であつた。」

なんでもシロツタは裁判官の所へその手紙を持ち込みルイジが彼を脅迫してる件で、彼を罰することが出来ないかを尋ねたところが裁判官が恚う答つたと云ふ噂であつた。

「勿論彼は罰しられるが、さうなると彼の兄弟がきつとお前さんを殺すだらう。彼等が此の島へ渡つて来てお前さんを殺すだらう。少し待つようにお進めする。その方が良い、怒りは愛のやうなものぢやないから。それは永久に盡きないからね！」

「裁判官はさう言つたかも知らない、彼は善良な聰明な人で非常に優れた詩も作る。然し私はシロツタが裁判官の所へ行つて其の手紙を見せたと云ふことは今もつて信じられない。いや、シロツタは正しい男だからそんな卑怯な仕打をしたがりはないとも。人々が彼を嘲けつたのだ。」

「私達は單なる労働者だ。私達は私達自身の生活を、私達自身の理想と意見を持つてゐる。私達が好み、そして最善と考へるやうな私達の生活をちやんとして行く力を有つてゐる。」

「社會主義？私の考へでは労働者は生れつき社會主義者なのだ。」

俺達は書物なんか讀まない、然し眞理を嗅ぎ出すことは出来る

——眞理は一つの強い香を帯びてゐる——労働のその汗の香と同じ香ひを。

偃

僕

偈 儂

金色の雨のやうな日光が、葡萄葉の暗い幕を通して旅館の露臺の上へ注ぎかゝつてゐる。まるで空中に張られた黄金の糸みたいだ。

灰色の鋪石や白い卓子掛の上に、その影は異様な圓形をなしてゐる。そして若し長い間それを凝視めてゐれば詩を讀むやうに、それを讀み知ることが出來、その意味がすつかり解るかも知れない。葡萄の房は、日光の中に眞珠か橄欖石のように輝いてゐる。そして卓子の上にある罐の水は藍色の金剛石のやうにキラ／＼閃めいてゐる。

卓子の列んでゐる間の道路に、丸まつたレースの手布が落ちてゐた。慥に誰か女が、美しい女が落したと云ふ氣がする——美人でないなんて、ありつこない。熱した詩情に充ちてるこんな溶るけるよ
うな日に、一切の平凡なものがそれ自らを羞ぢるが如く、太陽の前に堪へ難く姿を隠す、そんな日にどうして他のことが考へられよう。
花園で囀鳴る鳥の聲と花の廻りを群飛ぶ蜜蜂のうなりの外は全く音もない。

254

山に近い葡萄畑から歌の音が熱した空氣の中を漂ひながら耳に聞えて来る。

歌の主は一人の男と一人の女だ。二人の歌は相手が一寸歌ひ休む

のにつれて別々になる。そしてこうした沈黙の間に於いてその歌に歌手のある性格を持つて特殊な感じが湛はされる。

一人の婦人が花園から現はれ廣い大理石の石段を登つて来る。彼女は年寄つて非常に丈が高い。その暗い顔は眞面目氣、眉毛はぐつと蹙めた額の中に縮まつてゐる、そして彼女の薄い唇は「否え」と言ひ終つたやうにぎつと結ばれてゐた。瘦ぎすな彼女の肩に巻かれてるレースで縁に縫ひをして金色の襟卷は外套マントの様に見える。彼女の柄に比べて目立つて小さいその頭の白毛は黒布で蔽はれてゐる。片手に柄の長い赤色の日傘を持ち、片手に銀で刺繡した天鷲絨パツグの袋をさげてゐる。

255

彼女は、日傘の先で石鋪にコツ／＼軽い音をさせながら蛛網みたいな太陽の光線の中を兵隊のやうに確り歩いてゐる。

彼女の外形は嚴格を繪にしたようだ。其の鼻は鷲の爪みたいで、光つた顎の端には一つの大きな灰色がかつた疣がくつ附いてゐる。圓形の額は暗い眼蓋の上に突出して、その皺くちやな眼蓋の中へ眼が隠れ込んでゐる。その婦人がまるで盲目かと思られるやうに深く隠れてゐる。

彼女の後から石段の上へあひるみたいにあつちこつちへ體を振りながら一人の僂儂の四角張つた體が音もなく現はれた。大きな重たげな頭を前に垂れ、その上に茶色の中折帽を戴せてゐる。手を胴衣

の衣兜につツこんでゐるが、その胴衣が彼を一層幅廣く角張つて見せてゐる。彼は白色のちよつきを着て柔らかい白皮の靴を穿いてゐる。ぼんやりした口を半開きにして、黄色い不揃の齒を露出してゐる。彼の上唇に生えてゐる口髭は薄醜い、何故つてその剛毛はまばらで針金みたいだから。彼は短く重々しげに息を吐く。歩く時にはその短い足をびく／＼動かす。彼の大きな眼は疲れ切つたものゝやうに物うく地上を凝視めてゐる。そして小さい體を埋めてゐる。右の手の小指には貝をちりばめた大きな金の指輪を嵌めてゐるし、時計の衣兜には黒リボンの端に二つの紅玉を附けた大きな金飾りをしそして大きな——大きすぎる——正白石の醜恰好な石を藍のネクタ

イにさしてゐる。

第三の人が露臺に添つて彼等に續いて来る。小さい丸ぼちやの優しい赤い顔をした年寄の女で素早つこい眼をしてゐる。察する所、彼女は愛情があつて話好きの性質の人らしい。

彼等は旅館の入口を通抜けて露臺を横切りながら歩いてゐる。その様子は、なんだかホガースの——悲しく醜い異様な——そんな太陽の下より似合はない、——繪から抜け出た人物の様だ。凡てのものが彼等の前には暗く朦朧としてゐる。

彼等は和蘭人の兄弟で、金剛石の商人であり、銀行家である、或人の小供達なのだ。若し人々が彼等の言ふ事を信ずることが出来る

とすれば、彼等の生活は不可思議な事件に充ちてゐる。

小供の頃にはその僂儂は穩かで我慢強く、常住唄を歌つてゐたが、玩具なんか好まなかつた。このことは彼の姉以外の者からは別に注意を惹かなかつた。彼の父も母も醜い小供の姿をどうしたらいいかと思ひ續けてゐた。然し彼より四つ年上の姉には彼の性質を懸念する感情が萌してゐた。

姉は殆ど毎日、彼と一緒になつて出来るだけ彼を元氣づけようと努めてゐた。彼を笑はせるために彼女は玩具を彼につきつけるのが常だつた。彼は玩具を重ねて一種の金字塔を積み上げる。極めて稀に不精無精な笑を以つて姉の努力に報ひた。

決して彼は目に見えない何か不思議なものに悩まされてゐるやうに、その大きな眼の中に疑ひの色を湛へながら外の凡てのものに與へるその眼付で姉を見やるのであつた。こうした彼の様子は彼女を怖けさせ烈どく苛々させた。

「そんな風私を見るもんぢやありません！お前を阿呆にさせますよ！」彼女は靴を踏み鳴しながら叫んだ。そしてきまつて彼女は彼を掴つたり叩いたりした。彼は啜泣した。そしてその長い手で自分の大きな頭を蔽ふように抑へた。然し彼は決して姉の所から逃げ出したり不平を言つたりはしなかつた。

姉は暫くのち彼が自分に全く素直にしななければならぬと氣付

いたのを見て彼に言つた。

「お前は畸形兒なんだから利口にならなければいけないのだよ、さうでないとは皆の人が、お父さんもお母さんもそれから誰も彼も皆なお前のことを羞しがるからね！　こんなお金持の家に畸形兒がゐるなんて外の人だつて羞しいと思ふもの！お解りかへ？」

「えゝ」と彼は大きな頭を一方に傾げ暗い生氣のない眼で姉の顔を見ながら眞面目な様子で言つた。

彼の兩親は自分の娘が、その弟をこんな風に取り扱ふのに喜ばされた。二人は弟に對する娘の優しい心根を、そして段々彼女が僣僕にとつて有難い保護人になつて來たことを稱讚した。彼女に彼に玩具

で遊ぶことを教へ女王や妖精の物語りを讀んでやり勉強をさせるように力を添へた。

然し以前のまゝ、何ものにか達しようとしてもする如く彼は自分の玩具を高く積み上げる、そして勉強には身を入れなかつた。それでも怪しい話を聞く時には不思議な疑ふやうな笑をするのであつた。或る時姉に向つて彼は訊ねた。

「女王様はたいてい僞僕かへ！」

「いゝえ。」

「騎士は？」

「無論そんなことはありません」

其の少年は疲れでもしたやうに、息を洩した。姉は自分の手を、粗らな弟の頭髪の上に置いて言つた。

「でもたいてい賢い魔法使は僞僕だけどね」

「僕が魔法使になれると言ふの」僞僕は優しく言つた、それから暫く考へ込んでゐた擧句言つた。

「妖精つていつも美しいの？」

「いつも美しいともな。」

「姉さんみたいに？」

「さうさね、もつと美しいと思ふよ」と彼女はきつぱり云つた。

彼が九歳の折のことであつた。姉は二人連立つて散歩しながらづ

つと立列んだ家の所を通る時、いつも彼の顔に現はれる驚異の表情がその時も亦現はれたのに氣が付いた。彼は人々が働いてゐるのを熱心に見てゐたらしい、やがてぼんやりした眼を彼女の方へ返した。

「それが面白いの？」と彼女が訊ねた。

「えい。」と彼はお定りの短い言葉で答へた。

「なせさ？」

「解らないけど」

然し一寸心を述べた。

「あんな小さな人、そしてあんな小さい煉瓦、それだのにあの家はあんなに大きいから……街中あゝして造られるの？」

「えいさうですよ」

「私達のお家も？」

「さうですともさ」

彼女は彼を見遣り乍ら決然とした態度で言つた。

「お前は名高い建築師になればいゝ、さうだよ」

二人は彼の爲に一組の木工作を買つて來た。その時から彼は熱心になつて建築をするようになった。終日彼は自分の部屋で床の上に黙つて座つたなり高い塔を組み建ててゐた、それが音を立て、ひつくり反へると又積み上げる。夕飯の時食卓に向つてさへ常住ナイフやフォークやそれから拭巾フキンで物を組建てようと試みてゐる程熱中す

るようになった。彼の眼は一層落窪み、ちつと落ちついて来た。彼の手は段々輕快に絶へず休みなく動き手の達くものは何んでも持つて来て使ふやうになつた。

彼等が町中を歩いてゐる時に、彼は作業中の建築物の前へ來ると立ち止り、どうして小さい物からそれが大きなものに成つて空の方へ昇つて行くのかを見きわめようとするのであつた。彼の鼻孔は煉瓦の塵や埃らの匂ひを嗅ぐ時びく／＼動いた。彼の眼は薄膜で蔽はれたやうに曇つて來る。彼は町中へつつ立つてゐるのはお怪しいからと云はれても聞えないものゝやうだ。

「さあ行きませう！」姉は腕を擱んで急ぎたてるのが常だつた。

彼は頭を垂れて歩き出した。でも肩越しに後を振り返つて見てゐる。

「お前は建築師にならないか、いやかへ？」

彼女は繰返し恚う訊ねては、彼に此の思想を教へ込まふと努めた。

「えい。」

或る日夕食後、居間でコーヒーを待つてゐる時のことであつた、彼はもう玩具を棄て、専心に勉強をし始めなければならぬ時だと云ふことを彼の父が言つた。すると姉は認められてゐる自分の權威を振廻すやうな調子で、そして自分の意見をあらひざらひ述べたてゝ話した。

「お父さん、私は、あなたが弟を學校へ通はせないことを望みますわ」

父は丈の高い綺麗に顔を刺つた人で、キラ／＼輝く寶石を澤山飾りつけてゐた。彼は背をくゆらしながら答へた。

「なせ通はしちやいかんのだな？」

「なせだかお父さんお解りのくせに」

僂儂の身に關した話が換はされる間に彼は部屋から出て行つた。然も彼は靜かに歩きながら姉の言葉に耳を傾けてゐた。

「皆なあの子を馬鹿にしますわ」

「そりや、そうだけど」と母は低い調子で言つた、母の聲は夏の風

みたいに陰氣に響いた。

「あゝした兒供達は裏庭にちままつてなけりやなりませんわ」姉は熱心に言つた。

「え、あの兒にや威張れやしない。」と彼の母は言つた。「あの兒の頭には智慧がないんだから」

「お前の云ふ通りだらうが」と父が同意した。「いや一通りの智慧はあるから」

僂儂は戻つて來て戸口に立ち止つたなり言つた。

「僕は馬鹿なんぢやありませんよ」

「解つてゐるよ」と父は言つた。母も口を添へた。

「誰もそんなこと思つてはゐませんとも」

「お前はお家で勉強をおしね」彼の姉は自分の側に彼を腰掛けさせながら叫んだ。

「お前は建築師が知つてなければならぬことを皆な勉強するんですよ。好いでせう？」

「お前には解るね」

「僕になにが解るつて？」

「お前の好きなことが」

彼女は彼より、頭の半ば位、僅かに丈が高いに過ぎなかつたが、凡ての人、父や母よりも威張つてゐた。

僣倮は蟹みたいな恰好をしてゐたが、姉はきやしやですらつとしてゐて、その上、丈夫さうであつたため、その家庭の凡べての人々——小さい僣倮の彼にさへこの美力の前に美しく思はれてゐた。丁寧な形式ばつた連中が彼の所へやつて来て種々のことを説明したり質問したりした。然し彼は、彼等が教へようとしてゐることが少しも解らない、と遠慮なく口言した。そしてぼかんとした様子で彼の教授を聞流し、自分だけの想ひに耽つてゐるやうに見えた。彼が普通のことに少しの興味を有たないと云ふことが凡ての人に瞭然はつきりした。彼は口数が尠なかつたが、時々妙な質問をやつた。

「全く何んにもしたがない人々にはどんなことが起るの？」

黒のフロックコートの釦をきちんとかけた——僧侶と兵隊に同時に似てゐる——優良な家庭教師は答へた。

「こんな人には凡ての悪るいことが起ります。あなたに想像される何んでもです。例へば彼等の多くは社會主義者になるでせう。」

「有難う」と僣僕は答へた。彼が教師に對する態度と云つたら、いつも大人のやうに正しく遠慮深かつた。

「それで、社會主義者つて何んですか？」

「詰り社會主義者とは夢を見てゐる人です怠け者です——神様とか私有權とか國權と云ふ凡べての觀念を奪はれた精神的の不具者です。」

教師連は要點を簡單に答へるのが常だつた。彼等の答へは石道の石みたいにひつかりと人の記憶に固着させた。

「年寄りの女でも精神的な不具なになれますか？」

「勿論彼等の心中では……」

「そして娘も？」

「さうです。娘にはそれが持前の性質です」教師は彼にさう云つた。

「あの方は數學の才能が多少おありですが、精神問題に深い興味を示されます。」

「たんと話してやつて下さい」と彼の姉は教師と話してゐる彼の言葉を聞きながら彼に言つた。

「皆な僕より話すよ」

「あなたは神様にあまりお祈りをしませんね」

「神様は僕の僣僕を直して下さらうとしないんですもの」

「おや、お前は どうしてそんな考へを有つようになったんだらう」と彼の姉は驚いて叫んだ。そして彼を戒めるやうに言つた。

「こん度だけは許してあげるが、二度とそんな考へを云ひたがるんぢやありませんよ。」

「はら」

彼女はいつも着物を長く着流してゐた。彼は恰度十三になつてゐた。

そして今や、彼女の運命には多くの煩悶がふり懸り始めた。彼女は絶へず弟の仕事場へ這入り込んでゐた。板や道具や種々ごたごたしたものか、彼女の頭や肩先を掠めたり、彼女の腕に傷をつけたりしながら、その足元へ打ち倒れる。僣僕はその度に彼女の注意を惹くやうに叫んだ。

「あぶない！」

然も彼は、いつものろくさしてゐて無駄ばかりやつてゐた。或る時軽くちんばを引ながら蒼くなつて怒り出した彼女は彼に跳びついて彼の面前で勵ますやうにどなつた。

「お前は故意とぐずぐずしてゐるんだね、この不具者。」そして彼の

顔を叩つた。

彼の足は弱つてゐた。彼は轉んだ、そして床の上に座つたなり涙も滲さず、不平も云はず、ちつと押し黙つてゐたが、彼女に向つて恚う云つた。

「姉さんにはどうしてさう思へるの！姉さんは僕を愛してゐないんですか？愛してゐるんですか？」彼女は唸き乍ら驅り去つたがやがて戻つて來て言つた。

「此麼ことは前には決してありはしなかつたのにね」

「ありませんでした」と彼はその長い腕で大きな輪を作り乍ら口早に言つた。部屋の隅には板や箱が積み重ねてあつた。凡てのものが

ごちやんぐになつてゐる。壁に對して据ゑてある建築師で施般工の仕事臺の上にも、うづ高く木材が積まれてゐた。

「お前は何故こんなに屑だらけにするんですね」と彼女は疑はしげにそして無茶苦茶したやうに、四周を見ながら言つた。

「ごらんなさい」

彼は組立てに掛つてゐた、彼は小さい鳩の巢と犬小屋を造つて鼠機を工夫してゐるのであつた。姉は興味を有つて彼の仕事を見守つてゐた。そして御飯の時、そのことに就いて、兩親に誇らしげに話した。父は頭を首肯き氣に振り乍ら、云つた。

「凡てのものは小さいものから起るのだ。そうだ、凡てのものがさう

して始まるのだ。』

母は彼女を抱きよせながら自分の息子に云つた。

『あまり姉さんに厄介をかけないで自分でやるようにするんですよ』

『えい、自分でやります』 僣僂は答へた。

鼠機を仕上げた時、部屋へ姉を呼んで来て、彼はその不器用な仕掛を彼女に見せながら言つた。

『これは玩具ぢやありませんよ。ねえ。僕達はそれに専賣特許を得られます。どうです、簡単に丈夫なんですからね。ちよつと觸つてごらんさい』

其の娘は鼠機に手を觸れた。すると、どこかが、ほんとはちけて、彼女が金切聲を上げた。然し僣僂は彼女の周囲を踊り廻り乍らつぶやいた。『お、おや、おや』

彼の母が駆け込んで来た。召使達もやつて来た。彼等は鼠機を壊して娘の指を離した。指はすつかり紫色になつてゐた。皆なして氣絶してゐる彼女を連れ去つてから母が彼に言つた。

『みんな形づけて了い、もうお前には許しません。』夜になつてから呼ばれて彼が姉の所へ行くと、姉は彼に向つて云つた。

『お前はあんなことをたくらんでゐたんだね。お前は私を憎んでゐる。どうしてなの？』

彼はその隆肉を動かしながら静に云つた。

「姉さんは下手に手を、あれに觸れたんですもの」

「嘘をおつしやい」

「でも、どうして僕が姉さんの手を傷けたつての？僕を打つた姉さんの手だつて、そんなことないさ。」

「氣をお付け。堪忍かんにんしてやるから。え、片輪かたわものや」

「解りました」

彼が姉を酷い目に遭はせたのは不意の機だつたので姉の不幸のためには彼自身が譴責されようとは思ひもよらなかつた。彼の骨張つた顔は例の如くケロッツとしてゐた。彼の眼の様子も眞面目で確りして

ゐた。——彼に嘘が言へ、悪心にかられるなんてことは信じやうもなかつた。

それからと云ふもの、姉は彼の部屋へ餘り繁くは行かなかつた。彼女は美しい色の着物を着て澤山の蟋蟀こぼろぎみたいに喧しい、お喋り娘の友達連に訪門された。彼等は冷たい沈鬱なその廣い部屋に艶を添へ樂しさの輝きを與へた。——そこにある繪も花も像も、そして飾装品も一切の物が彼等の前では暖かく見えた。

折々姉は彼の部屋へ皆なを連れて行つた。彼等は小さい淡紅色ピンクに染めた手を氣取つた風に差し伸べ、それを壊すのを心配でもしてゐるやうに慎々しげに彼の手を取つた。彼等は軽い驚異を見せながら

も愉快に樂しげに彼と話した。然し道具の中で忙しげに圖を描いたり、木の片を割つてゐるその小さい僂僂には別に興味を示さなかつた。彼は娘達が自分のことを『發明家』と呼んでゐるのを知つてゐた。彼の姉がいつか父の名を輝かすような何かが彼に期待されると云ふことを彼等に語り、さうした思想を彼等に植ゑつけてゐた。彼の姉は確信を以つてこゝう言つてゐたのだ。

『そりやあの兒はあんなに醜いけど、でも随分利口なんですわ』彼女は時々彼等に恚う云つた。

彼女の兩親が一緒に海で溺れ死をした時彼女は恰度十九歳になつてゐて一人の戀人があつた。兩親は快走船に乗つて楽しい旅行をし

てゐたが、酔つぱらつた舵手の失策から或る亞米利加の荷積船と衝突して沈没したのだ。彼女も兩親と一緒に行く所だつたが、齒が痛んでゐたので残されてゐたのであつた。兩親が死んだと云ふ報せがあつた時には、彼女は齒の痛みも忘れて、部屋中を腕を押し伸ばし叫びながら狂ひ廻つた。

『嘘だ。嘘だ。そんなことありやしない』

僂僂は戸口につつ立ち帷を自分の身に巻きつけながら、ちつと彼女を眺めてゐた。そして隆肉をびくつかせながら云つた。

『父さんはあんなに丸っこくぶく／＼してゐるのに、どうして溺れたんだらう、僕にや解らないな』

「お黙りなさい。お前は誰のことも愛しちやいないのだから」

「僕はあつさりうまい口が利けないさ」と彼は答へた。

父の屍はとう／＼発見されなかつた。母は衝突の瞬間に死んだのだ。彼女の屍は蔽はれて棺の中に横はつてゐた。それは宛然で老木——生きてゐる時でも彼女はそんな風に見えたが——の枯れた枝みたにかさ／＼に曲つてゐた。

「もう、お前も私も獨りぼつちになつて了つたのだわ」と姉は母の葬式が済んでから弟に向つてきつぱりと、然し物悲しい聲で云つた。「困つちやつたわね。私達は世間には全くうといのだから、眞實にどうしたらいいのかしら。結婚ももう出来ない、あゝいやだ」

「おゝ！」と僣僕は叫んだ。

「おゝつて、お前どうしたの？」

彼は暫く考へてから云つた。

「僕達は獨りぼつちなの？」

「お前、それを嬉しがつてるように云つてるんだね」

「僕、何んにも嬉しがつては居ませんよ」

「お前がそんなに小供らしいから情けなくなるよ」

夕方彼女の戀人が訪ねて來た。——元氣な小男で白い眉を持ち、羊髭をばやした丸い黒づんだ顔をしてゐる。彼はその夕暮中笑ひ續けてゐた。たぶん一日中でも笑つてゐられるらしい。

二人は許婚になつてゐた、そして町中で最も美しい静かな或る目抜き場所へ二人のために新宅が建築されつゝあつた。僮僕はその建築を見に行かなかつた。その話しを人から聞くのも好まなかつた。

ある日の事、許婚の男がてぶく／＼肥えた、小さい手に澤山の指輪を嵌めてる彼の肩を叩き、細かい齒をづらつと見せながら云つた。

「君も来て見ないかねえ？ どうですか？」

彼は暫くの間妙な口實を楯に拒んでゐたが、終に承知してその男と姉と連れだつて出かけた。

男達二人は足場の天邊へ攀つたが足を踏みはずした。許婚の男は

真逆様にセメン張りの地面へ墜落した。弟は着物が足場に搦んだので空中にぶら下つた。そして職人に救はれたのだ。彼は足と手頭を挫いただけで済んだ。そして顔をすりむいた。それに引替へ許婚の男は脊中に酷く傷我を受け、そこから中に大傷を作つた。姉は目をむいて打ち倒れた、そして白い塵煙をたてながら両手で地面を掻き撈つた。彼女は一ヶ月以上も泣き暮れてゐた、そこで母みたいになつて了つた。瘦せ衰へて冷たい表情のない言葉でものを言ふようになつた。

「お前のために私は不幸なんだよ」

彼は何んにも答へずに、地上へその大きな腫を向けてゐた。姉は

黒衣を身に纏ひ、彼と向ひ合ふといつも眉を寄せ齒を喰ひしばつてゐた。そのためか彼女の顎の骨は鋭く骨張つて來た。彼は努めて姉の視線から避けるやうにしてゐた。そして獨り默然として、ひつきりなしに設計をしたり圖面を描くことに逐はれてゐた。そんな風にして彼は丁年まで生活してゐた、その間二人の全生活は公然と一つの争に費やされてゐた。その争はお互が侮辱し、傷け合ふ一つの強い争で二人を縛びつけた。

丁年に達しかけた頃のある日、彼は兄のような調子で彼女に言つた。

「賢い魔法使ひや美しい妖精なんかゐるものか。只だ男の人間、女

の人間がゐるばかりさ、その中の或る者は悪狡く、或る者は愚呑なんだ。善に就いて話されてゐる凡てのものは皆な無稽のことなのさ。でも僕はその無稽なことが事實になることを望む。姉さんは「金持の家では何から何まで美しく立派でなければならぬ」と云つたのを憶へてゐるでせう？富んだ町だつて矢張り凡てが美しくなければならぬ、私は郊外に土地を買つてそこへ私や私みたいな片輪者のために一軒の家を建てやうとしてゐます。私は片輪者を連れて行きます。町ぢや、彼等の生活は自分達を蔑げずむ姉さんみたいな人のために堪へ兼ねる程不愉快なんですからね」

「いゝえ。そんな真似がお前に出来るもんですか、そりや狂人ぢみた

考へと云ふもんです』と姉は言つた。

『姉さんにはさう思へるでせう』

二人はとげ／＼しい敵對的な態度でそのことを言ひ争つた。その言ひ争ひはお互に憎しみ合ひ、然も二人の憎惡を少しも包む必要のない人のやうにいがみ合つた。

『それは決定してることなんです』と彼は云つた。

『私に構はずに』と姉は答へた。

彼は隆肉をそびやかして立ち去つた。間もなく彼の姉は、土地が買收され、その上職人がもう土臺の溝を掘り始め、澤山の煉瓦や、石やそれから鐵材や木材が馬車で運び込まれるのを發見した。

『お前は、自分が未だ小供だつてことを思はないのかへ？』と彼女は問ひつめた。『遊戯事いたづらに考へてるんだね？』

彼は答へなかつた。

或る日、彼の姉は白馬に引かせた自分の小さい馬車に乗つて、凭りかゝつたり反つたり豪然とその町へ乗り込んだ。彼女は職人が働いてゐる場所は馬車の歩みを緩めて通つた。そして組建てられた鐵梁はりに置かれた肉の片硝みたいな赤い煉瓦や、神經の網みたいに重なりあつて積まれてる材木を冷やかに眺めた。彼女は遠くの方に彼女の弟の蟹のような姿を見とめた。彼は手に杖を持ち皺苦茶な帽子を頭に載せ、足場の廻りを這ひ廻つてゐた。塵まみれになつてゐた彼は

宛然^{ホシ}灰色の蜘蛛みたいに見えた。家で彼女は彼の昂奮した顔をしげしげと見た、そして其の暗い眼がだん／＼優しく晴々しくなつて來るのを見た。

『いゝや、』と彼は自分自身に靜かに言つた。『俺は一ツの理想にぶつかつてゐる、それは凡てのものに同様に善くなければならないのだ！建築をすると云ふことは驚くべき仕事だ、そうして俺には、やがて自分が幸福な人間になれるつて云ふやうな氣がする』

『幸福？』彼女は僣僕^{カウチ}の體を怪し氣にそして疑はるやうに見ながら訊ねた。

『さうです、姉さんは働いてる人達は私達と全く違つた人達で、彼

等は皆んな新らしい思想に醒めてゐることを知つてゐるでせう……一人の煉瓦職工が自分で澤山の家を建てた其の町の通りを歩くなんて善いことに違ひありません。

職人……全く確りした正直な人の中には多くの社會主義者がゐる。實際彼等は優れた彼等自身の感覺を有つてゐる、——私には私達が人々を理解出來ないやうに思はれますもの。』

『お前は妙なことを言つてるね』と彼女は言つた。

僣僕は段々活氣を帯びて來て、日毎話し好きになつて來た。

眞實に何んでも姉さんの思ひ通りになります。片輪者から町を自由にする賢い惡魔使に私はなりつゝあるんです。若し姉さんがお

希みなら、姉さんは美しい仙女にもなれます。どうして姉さんが私に助力しないんです？」

「そんな話しは又にしませうよ」と姉は時計の金鎖をいちりながら言つた。

ある時、彼は彼女には全く聞き馴れない言葉を口にした。

「私は姉さんに害を加へましたが多分姉さんはもつと私を虐待してゐました。」

彼女は驚かされた。

「私がお前を虐待した？」

「まあお待ちなさい。眞實に姉さんが考へてゐるやうに私は罪人で

はありません。私は變な歩き方をします。人は私を蔑すむでせう。でも悪意があるのではありません、いえ私を信じて下さい。私は私を慈しんで呉れる姉さんの手を傷けやうとしたのは十分私が悪るかつたのです。」

「そんなことは言はないでいゝよ」

「人間は優しくしなければならぬことが、それで私に解りました」と僣倮は言つた。「善は無駄なことではありません。出来ることです」

町の大建築は進捗して行つた。それは豊かな土地に根を張つて空へ聳えてゐた。空はいつも灰色がかつて雨模様がしてゐた。

或る時役人の一團が職人の仕事をしてゐるその場所へやつて來た。彼等は建築物を調べてゐたが、仲間同志でひそ／＼話し合つた舉句、其の仕事を打ち切るように命じた。

「姉さんが止させるんだ」と僮僕は姉に跳びかゝり、その長い力強い両手で彼女の喉に掴みかゝりながら叫んだ。然し數名の人が駆け寄つて彼を彼女から引き離した。姉は皆に言つた。

「皆さん、あれは眞實に變になつてゐるんですから氣を付けなければなりません、大變可愛がられてた父の死んでからつても、間もなくあれがあんな風になつて了つたんです。召使にお聞きになつて御覽なさい、召使は皆なあれの病氣のことを知つてゐます。」

召使達は自分等が小供の頃から暮してゐた家の名譽を大事にしてゐたのです。私も亦私達の不幸を努めて隠してゐました。發狂した弟のことなんかみつともないからです。」

彼は此の話を聞いてゐる中に顔が蒼ざめて來た、そして眼が眼窠からとび出した。彼は啞然とさせられた。そしておし黙つたなり自分の爪で身を抱へてゐた腕をひつ掻き廻した。その間に彼女は言葉を續けた。

「此の家は途方もない企てでした。私は狂人の救護所として父の名義で、それを町へ建てたいと思つてゐたのです」
彼は身振りして夢中に叫び去つた。

姉は、彼が先に立つてやつてゐた時と同じ速度でその建築を續けて行つた。そして家が落成した時其所へ這入つた最初の看者は彼女の弟であつた。七年の間彼は其所で暮らした……彼にとつては憂鬱を増し衰弱する長い時であつた。

さうしてゐる中に姉も年寄つて來た。彼女は母になると云ふ迄の凡ての希望を失つた。そして同時に彼が自分に支配され、自分に反抗されなくなつたのを知つて、彼の面倒を見るようになつた。

そして今や二人は盲目の鳥みたいに、彼方此方と世界中を旅行してゐる。二人が眺める凡てのものに何んの感じも歡びない。そして何處にも二人を待つてゐるものも見られない。

母性の力

母性の力

吾々は母性を讃美しようてはないか。全勝の一生を送つた人も母と云ふ女から生れたのである！

吾々は跛ちんぱの山猫、恬木兒チキムール——幸運の征服者、大キラン——異教徒と呼ばれたタメルラン——即ち全世界の破壊を欲したところのその人に就いて語らうと思ふのだ。五十年間の星霜と云ふもの、彼は宛然象の脚が蟻塚を踏み潰すやうに、その鐵蹄で世界を蹂躪して行つた。彼の行手には致る所眞赤な血の河が流れた。彼は自分の征服した人々の骨で高い塔を築いた。彼は死の力を以つて生命を破壊し、

それで彼の息子のジャンジイルの奪はれたことに對して復讐したのだ。彼は恐るべき人物であつた。何故なら、彼は自分の犠牲として凡ての者の死を欲したのだ。

彼の息子のジャンジイルが死んでサマルカンドの人々が黒や薄藍色の衣服を纏ひ、頭には砂や灰をかけて、残忍なゲツツの征服者に眼見えたその日から、死がオトラルで彼に面接して彼を征服したその日まで、三十年間と云ふもの恬木兒は笑ふことをしなかつた。彼は唇をちつと結んだまゝ、誰に向つても頭を下げる事が出来ない。そして彼の心はその間慈悲の情に閉ぢられてゐた。

吾々をして死が恐れ服する只一の力である母性を讚美させよ！

さて吾々は一人の母に就いてここに一つの事實談を話さう。死の従僕、死の奴隸、地上の血生息い災禍たる鐵血タメルラがどうとし母の前に平伏したかを……

それは斯うである。

恬木兒は薔薇とジャミンの雲に蔽はれたカニガラ谷の谷間で饗宴を催してゐた。その谷はサマルカンドの詩人から「花の愛」と名附けられてゐた。ここからは大きな町の輝く藍色の炎塔や回々教の寺院の圓屋根が眺められる。

千五百もの丸い天幕が宛然無數のチューリップの花の様に扇状をなして擴がつて居た。天幕の上には絹地の旗が幾百ともなく、生々

しい花のやうに静かに靡いてゐた。

それ等の澤山な天幕の真中に圍まれてゐる恬木兒の天幕は宛然女
王のやうだ。四角に張られたその天幕は、各面が夫々百歩程の長さ
があり、高さも云へば槍の三倍もある。屋根は人間の體位ゐの太さ
をした、十二本の黄金色の圓柱の上に支へられてゐる。そして黒と
黄と淡藍色で彩色した絹地で作られて五百本の紅い綱がそれを地面
に締め付けてゐる。その四隅には銀製の鷲が一つづゝ置いてある。
そして藍色の丸天井の下にある、天幕の中央の玉座には第五の鷲が
坐してゐる。彼は少くとも五千の大真珠で飾りつけた淡藍色の絹の
上布を軽やかに羽着つてゐた。畏縮して見上げ憎い彼の灰色の頭に

は、尖端に紅玉を附けた白い帽子を冠つてゐた。前後に揺らぐその
紅玉は、世界を見下してゐる燃えたつ眼のやうに輝いてゐた。

彼の顔は幾千年もの間に血の中に浸され、血に錆びついたナイフ
のやうだ。彼の眼は細く小さかつたが、それでゐて何物をも見極め
た。その眼の輝きは、異教徒達がエメラルドと名付けて、癩癩を治
すことが出来るると云ふところから、アラビヤ人が珍重してゐる「ワ
アラムツト」と云ふ寶石の冷たい輝きに似てゐる。

王は美しい娘の唇の色を思はせるセイロン産の紅玉を耳飾りにし
てゐた。地上には比にもない毛顛が敷かれ、三百の金の盃や饗宴に
必要な一切の物が列べられてゐる。恬木兒の後には樂人達が立ち列

び、彼の足下には彼の^{ちつきん}者、各國の王や王子や、彼の軍隊の指揮官達が居並んでゐた。彼の側には誰もゐなかつた。凡ての者の中で一番彼の側近くゐたのは酒に酔つてゐる詩人のケルマニであつた。彼は或る時世界の破壊者から「ケルマニよ、若し私が賣られるものとすれば、お前は幾程を私に拂ふな？」と尋ねられた時、この死と恐怖の播手に向つて彼は、

「二十五を」と答へた。

「だが、それは私の帯びだけの価値もしないではないなか」と恬木兒は驚いて叫んだ。

「私は帯だけの価値を考へて居りました。帯びだけに就いてはござ

います。何故と申せば、貴方御自身としての価値がそれ程お有りとは思ひませんから。」とケルマニは答へた。詩人ケルマニは王中の王魔王の如き人物に向つて斯う言ひ放つたのである。

吾々をして真理の友である詩人の光榮が常に恬木兒の光榮よりも一層高くあることを尊ばせよ。吾々をしてこの只一の神——真理に對する恐れなき言葉を最も美しく語れる——の力を持つてゐる詩人を讚美させよ？

それは戦争と勝利の輝かしい酒宴の催された歡樂の時であつた。音楽と闘技が開かれた。戰士達は王の天幕の前に垣を成し、命を取り合ふことに自分達の勇敢さを示さうと振ひ立つた。種々の色をし

た冠のいくつものがころげ落ちた。頑強な連中は闘つた。曲藝師は體に骨がないのかと思はれるやうな眞似をやる。象までがなか／＼優れた演技を演る。赤や緑に色どられたそれ等の象は或は滑稽に或は恐ろしげに見えてゐた。恬木兒の部下達が彼に對する怖から彼の名聲に對する誇りから、そして戰の疲れと、酒と馬乳酒コハミスクに酔ひどれてゐる、この狂喜の瞬間にあつて、突然そのざわめきの中から宛然稻妻のやうに女の叫び聲がトルコのバヤゼットの征服者の耳へ響き寄つた。彼の痛ましい魂——死によつて痛められそしてその爲に人類の生命いのちにとつては酷ひどく慘忍になつてゐる——彼の魂には暴慢な鷲の叫び聲こそ調和し親しいものであるのに。

彼は歡喜を打ち消すやうな、この叫び聲を誰がたてたのかを詮儀せんぎせよと命じた。

するとぼろ衣を纏ひ、埃まみれになつた一人の女がやつて來てゐるのだと云ふことを報せられた。その女は狂人のやうになつて、アラビヤ語を使ひ乍ら——全世界の支配者に面會を求めてゐるのであつた。

「其の女を連れて來い。」と王は言つた。

彼の前に立ち現はれた女は、素足のまゝで、日に晒されたぼろ衣を着てゐた。女の黒髪はばら／＼に垂れ下り露出ひだしになつた胸を蔽ふてゐる。その眼は命令的な表情を示してゐた。そして枯葉色のそ

の腕は「跛の人」の方へ指し延べられた時にさへ、震へてはゐなかつた。

「トルコのバヤゼツドを打ち破つたのは貴方ですね？」

と彼女は尋ねた。

「さうだ。私がある人だ。私は多くの者を征服した、だが私は未だ勝利に疲れてはゐない。女よ、お前はお前自身のことには就いて何を話さうと云ふのだな？」

「お聞き下さい」と女は云つた。「貴方が何を成さうとも構ひません。貴方が單に男としては、でも私は一人の母です。貴方は死デツスに仕へます——私は生ライフに仕へます。貴方は私の前に罪を犯してゐ

ます。私は貴方の罪の償を貴方に求めに來たのです。人々は私に「正義は力なり」と云ふ貴方の警句を話しました。私はそれを信じません。でも貴方は私に正義でなければなりません。何故なら、私は母ですから。」

王はこの侮辱を寛大に許す程賢明であつた。そしてその蔭に潜む言葉の力を感じた。

「まあ坐つて話すがいい。私はお前の話しを聞いて上げる。」

女は喜びに王の側近く、毛氈の上に坐つた。そして次のやうに語つた。

「私はサレルノの近くから参りました。そこは伊太利のすつと向ふ

にあります。——貴方は御存じないでせう。私の父は漁夫でした。私の夫も矢張り漁夫でした。夫は幸福なそして美しい男でした。夫を幸福にしたのは私です。私はその上一人の息子を持つてゐましたが、息子は世界中で一番美しい子供でした。」

「私のジャンジイルのやうに」と老ひたる勇士は静かに口を入れた。「私の息子は美しくて惻かな小供でした。小供が恰度六歳の時でした、サラセンの海賊が私達の海岸を襲ひまして、私の父も私の夫も、それから多衆おほぜいの人達がその海賊のために殺されました。息子は海賊のために誘拐かどわかされ、そのために私は四年間と云ふもの息子を訊ねて世界中を彷徨さまよひしました。息子は今貴方の許に居る筈です。」

私は知つてゐます。何故ならバヤゼットの戦士は捕虜として捕へられバヤゼットを従へた貴方は彼の所有物の凡てを捕獲したからです。貴方は私の息子が何處にゐるかを慥かに御存じだ。貴方は息子を私に返して下さらないなければなりません。」

「彼女は狂人だ」と恬木兒の友人や各國の王や王子やそれから將軍連は私語いしやき合つた。そして一濟に笑ひこけた。

然し詩人のケルマニはその女を眞面目に見つめるのであつた。そして恬木兒は異様の感に打たれてゐるやうに見えた。

「彼女は母として狂つてゐるのです」と詩人は静かに言つた。然し王は——世界の敵は答へた。

「女よ、お前は其處知らぬ國から海を渡り、河や山を越し、森を抜けてどうしてやつて来たのだね？野獸や、それから恐ろしい野獸より、もつと狂暴な人間がお前を傷けやしなかつたか？お前は及物を持たず、又お前をそれ等のものから保護する力強い道連もなしにやつて来た。私はお前を信ずるためにも、そして又お前を理解することから私の驚きを拂ふためにも、私は凡てを知らなければならぬ。」

吾々をして母性を讚美させよ！母性の愛は束縛されることなく、その息は全世界を養つてゐる。

人間の裡の最も美しいものの凡ては日光と、そして母の乳から湧

く。吾々の生命の愛の泉はそれである。

女は恬木兒に答へた。

「私は一つの海を、澤山の島がある海を越して来たのです。私はあそこで漁船を見ました。人が自分の愛する者を尋ねてゐる時には、いつも風は優しく吹きます。山？私は山は見ませんでした。」

「山も愛する時には谷をなす」と詩人ケルマニは笑ひ乍ふ云つた。

「さうです、途中には森がありました。野性の牝豚や、熊や山猫や、見るからぞつとさせる山犬がおびやかすやうに頭を垂れてゐました。貴方のやうな眼をして山猫が二度も私をおびえさせました。でも獸は皆、心を持つてゐます。私は貴方にお話したそのまゝを

獸に話しました。彼等は私が女であり、留息を吐き乍ら遠くへ行つたことを信じました。彼等は私を憐んで呉れました。貴方は獸でさへ幼ひものを愛して、その生命いのちと自由のために戦ふと云ふことを御存じないのですか？」

「その通りご、お前」と恬木兒は云つた。

「絶えず獸の愛は、人間よりも強くして、そして人間よりも烈しく戦ふと云ふことを私は知つてゐる。」

「人間は」と彼女は小供のやうに話し續けた。

凡ての母と云ふものはその魂に於ては小供であるから。

「人間は常にその母の小供です。何故つて、何人だでも母親を持つて

ゐる。何人でも誰かの子ですもの。老人の貴方でさへ、一人の女が生んだのです。」

「全くだ。女の人よ！」と恐れなき詩人ケルマニは叫んだ。

「貴女は山犬の群から犢を生ませることは出来ない。太陽なしに花を咲かせることは出来ない。愛なしに幸福はあり得ない。母がなければ詩人も英雄もないのだ。」

そこで女は言つた。

「私に私の小供を返して下さい。私は母です。そして私はあの子を愛してゐるのです！」

吾々をして女の前に平伏させよ。

——女はモーゼやマホメットや

大豫言者基督に生を與へた。基督は無知なる者のために狂人扱ひを受けた、然も彼は「生と死を裁くために起つて来る。それはダマヌカスに起る」と執行官も云つた通りをなした。

吾々は各時代を通して偉大な人々を生み出す彼女、母性の前に平伏さう。アリストートルも、母の子であつた。正直な愛すべきサアデイも、オーマーカイヤムも、そしてアイスキャンダーも、盲目のホーマーも凡ての者が母の子であつた。凡ての者が母の乳を呑み、母の手で彼等がチュエリツプよりも小さい時に——世の中へ導れ出されたのである。

世界の凡ての誇りは母に歸するのだ。

そこで都市の灰色の破壊者、跛の虎、恬木兒大人はじつと考へ込んだなり暫く沈黙に耽つてゐた。やがて彼は居列ぶ人々に向つて口を開いた。

「皆よ、私は（神の僕である恬木兒は）今私が云はなければならぬことを言ふのだ。私は長年生きて來た。そして大地は私の下に呻いてゐる。三十年間、私はこの自分の手で死の報ひを破壊した。私は死に復讐したのだ。何故なら死は私の心を闇にした——私のジャンヂイルを奪つたからだ。

他の者は町のために、王國のために闘つた。だが誰も人間のために力を盡した者はない。人々は私の眼の中に何んの尊さも認めな

い。私は人々が自分を他の者と同じに見てゐることに気がつかなかつた。私はバヤセツトを従へた時、彼にこう云つたのは私だ、この恬木兒であつた。

「おゝ、バヤセツト、王國などと云ふものは神の前には何でもないとしか思はれない。あなたは、神が私達——あなたは片輪であり、私も跛だが——人間の手に王國を與へてゐることは知つてゐる。私は鏈で縛された彼が鏈の重さに呻き乍ら私の前に引き出された時に彼に向つて云つたのだ。私は彼の不幸を見つめた。そして愛と云ふものは苦地に生える雑草のヨモギのやうに悲惨みじかなものだと感じた。

神の僕たる私は何をなさねばならないのか、さうだ、私はそれを言ふ。女よ私の前に坐るがよい。

彼女は私の魂の中に、私が是迄に全く知らなかつた感情を目覺めさせた。彼女このひとが何故こんなに力強いのか私にはそれがそく了解された。

彼女は愛してゐるのだ。愛は、彼女の息子は數世期もの間、炎となつて燃えたち、消えることなき生命の火花であることを信じられることによつて、彼女を力づけてゐるのだ。凡ての豫言者は小供ではなかつたか、凡ての英雄もか弱いものではなかつたか？
おゝ、ジャンジイル、私の眼の光よ。お前は大地を暖め、地上に

幸福を播き散らす運命であつたに違ひない。だが私は地上を血で染め、地を肥したのだ」

そこで「國民の答」は長い沈黙に沈んだが遂に彼は言ひ放つた。

「私は、(神の僕たる恬木兒は)私のなすべきことを命ずる。

三百の騎兵は我王國の四邊をくまなく廻つて此女の息子を捜し出しに行くのだ。彼女はこゝに待つてゐる、私も一緒に待つてゐる。自分の鞍に子供を乗せて戻つて來る者は幸福であらう。女よ、それが正しいことだらう？」

女はその顔から黒髪を掻き上げ乍ら、そして恬木兒に向つて微笑みながら答へた。

「おゝ、正しい王様よ！」

すると恐るべき老人は立ち上り、黙つたなり彼女の前に跪いた。

晴々しい詩人のケルマニは小供のやうに喜こんで歌ひ出した。

「花と星の歌よりも、尙樂しきものはなに？」

誰も語らぬ愛の歌。

五月の眞晝のその太陽より、心を奪ふものはなに？

愛する者は答へよう、私の愛する彼女と。

おゝ、私は知つてゐる、更けゆく夜のその空に、輝く星の美しさ。

そして私は知つてゐる。目眩き夏の太陽が、輝くその日の氣

高さを。

でも私の愛する者の眼まなざしは、凡ての花より優つてゐる。
そして彼女の微笑ほえみは、五月の太陽ひよりも心を奪ふ。

誰も凡ての歌のその中で、最も優れて魅力ある、歌を歌ふものがない。

凡てのもの、初めであり、全世界の心の歌。

女の魔術的な心、そして我々凡ての母の歌！

恬木兒は彼の詩人に言つた。

「ケルマニよ、尤もだ！神は、神の知恵を傳へるために、お前の唇を選ぶのに間違いはなかつた。」

「さうです、神自身は偉大な詩人です。」

と酔ひどれたケルマニは云つた。

女は微笑んだ。そして王や王子や戦士達は、彼女を、女である母を——見つめた時、小供のやうに一済に微笑んだ。

.....

凡ての此のことは眞實である。この事實は何を語つてゐるか？凡ての母達は知つてゐる。母達に尋ねたならば答へるであらう。

「さうです。これは永遠の眞理です。私達は死よりも偉大な力です。その私達は聖人を、詩人を、英雄を、世界に絶えず生み出します。私達は光榮ある凡てのものに其の種を播くのですから。」と。

大正九年三月二十日印刷
大正九年三月廿九日發行

〔叛逆者の母〕
定價金壹圓七十錢

不許複製

譯者 渡平民

發行者 遠藤孝篤

印刷人 田中金一郎

印刷所 東京市京橋區長崎町二丁目九番地
田中活版所

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所 文泉堂

振替東京四四六八七番

18
292

1871

終